あるが，2月の場合に比べると一般には寒気が弱いため影響の程度も弱いようである．

終りに御校閲御配慮を頂いた前富山地方気象台長太田芳夫氏，同台 佐藤正夫氏，福井地方気象台長 原口勘助氏・名古屋航空測候所長船津康二氏，横浜地方気象台高橋市作氏に深謝の意を表する．

文　献

高田隆祐，1967：500 mb 面図よりみた関東・東海地方における冬季持続的悪天について，東海地区気象研究会誌．

和達清夫監修

新版気象の事典

東京堂，1974，704 pp，¥ 5,800

気象官署に気象解説官というポストができて早くも2年を経過した．解説官は上級官署から送られてくる天気図解析の結果や府県の予報をもとにして，“局地の予報や観測資料”という製品を広く国民に解説して“販売”する立場にある．毎年，全国の解説官たちと交流する機会があるが，その際必ず「座右にどんな気象の教科書を備えておいたらよいか」と聞かれる．解説に際して即座に疑問を解決してくれる良書を望んでいるのである．平生，天気相談という広い分野の人たちと接している実務上の経験から，まず「気象の事典」を推せんすることにしている．しかしこの事典は必ずしも万能ではないので，補助的に2，3の本（例えば，技報堂：気象学ハンドブック，岡田の気象学―いまでも不朽の名著と信ずる）を付け加えることにしている．

本書の旧版は1954年で，増補版が1964年に発行されたが，増補内容が巻末に付録の形で収められているので索引しにくかった．10年ひと昔というように，気象学もここ10年の発展はめざましい．この新しい知見をもりこみ，利用しにくい点を改良して増補版から10年を経た今日，新版が出されたことは意義がある．本書については諸氏の推せんもあるし，いまさら付け加える必要もないが，内容を一べつしての感想を述べよう．

最近は登山者やゴルファーの雷災がきわめて多く，避雷針の保護範囲はどのくらいかなどの相談が多い．そこで避雷について知るためかみなり（雷）の項を見ることにする．旧版の雷を見ると，かみなり雲，雷雨の分布から避雷に至るまで13項目に分けて書かれてある．新版の雷の項では，かみなり雲，雷の分布から雷雲中での電荷分布まで6項目については書かれているが，避雷については別頁の独立項に旧版以上に詳細に記されている．雷の項に避雷を見よとの注記もないので，これを知りたい読者は避雷の独立項を見つけるまでかなりの労力といらだちを覚えるかも知れない．また，日本や世界の積雪の状況を知りたいときは，旧版のせきせつ（積雪）を見れば用が足りたが新版では該当項目を見つけることができなかった．旧版の大項目主義を廃して，新版では中・小項目主義をとったという編集方針は時には読者に不親切となりかねない．

事典という意味は広辞苑によると，「ことがらを集めてその一々に解説を施したじびき」とある．また辞典や字典は「ことばをあつめ，一定の順序にならべ，その読方・意義・語原・用例などを解説した書」とある．つまり事典は用語字典と違い，解説が適確でわかりやすいことが必要である．この点，本書は第一戦の専門家39氏の筆による権威のある解説であるが，項目数を旧版の3倍（4,000項目）に増やしたことで，字数制限のためか内容がぎっしり詰め込められて理解しにくくなった箇所がある．現場の解説で最もむずかしいのは，種々の原因がからみ合った霧や雷の説明であろうし，専門外の人が知りたいと思うのは基本的な高・低気圧や前線のことであろう．これらがわかりやすく書かれているかどうかである．旧版の啓もう的要素を残して新版が書かれたとすれば，重要項目については惜し気なく頁数を割き，図版を豊富にし理解できるようにしてほしい．よい解説は事柄の裏も表も知りつくさないとできないものである．

以上1，2の希望もあるが，本書を手にした専門家外の人たちも気象について正しい理解と興味をもつことが期待されるし，気象上の疑問を即座に解決してやろうという配慮の下に編集されたといってよいだろう．10年ごとに改補されてきたから，1984年にはどんな新しい事典ができるか今から楽しみである．

（宮沢清治）